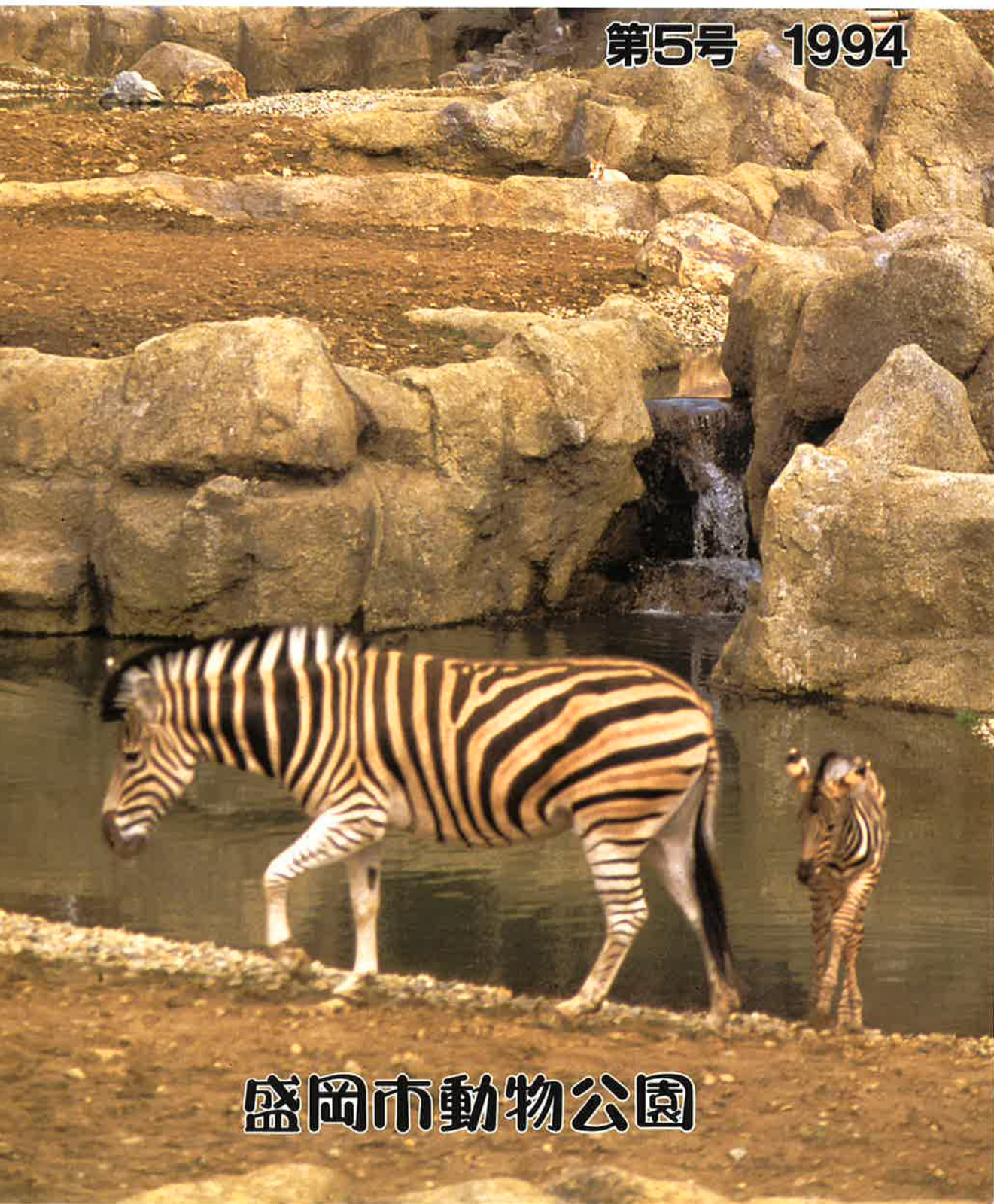


# zoo もりおか

第5号 1994



盛岡市動物公園

# 目次

表紙説明 (チャップマンシマウマ) .....	2
テーマ：子を残す工夫 .....	3
ライオンの子育て .....	4・5
有袋類の子育て .....	6
ダチョウの子育て .....	7
おなじウサギなのにこんなにちがうよ！ .....	8・9
アフリカゾウの子育て .....	10・11
フラミンゴの子育て .....	12
子を残す工夫—動物園での仕事 .....	13
紹介します！ .....	11
どうぶつこうえんウラばなし .....	14・15

## 表紙写真説明

### チャップマンシマウマ (奇蹄目ウマ科)

動物公園では、平成3年のアフリカ園オープン以来、チャップマンシマウマのあかちゃんが2頭産まれました。

子どもは産まれると30分ほどで立ちあがり走れるようになります。産まれて4日目に初めて外へ出た時は、少し緊張した様子で母親にぴったりくっついていましたが、すぐ元気よく後足をけりあげてはねまわっていました。体の割に長い足が何とも頼りなく見え、転んだりしないかとハラハラしました。

一週間もすると親のまねをして、草をしゃぶるようになります。

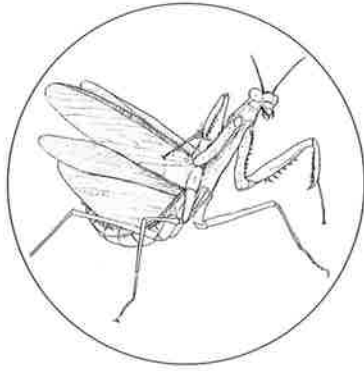
いっしょに放されている大きなキリンを特にこわがることもなく、平気で足元によっていきましたが、時々いじわるなダチョウに追いかけて逃がまわっていました。

子どもはもうずいぶん大きくなり、もうすぐお母さんと変わらない大きさになります。

毎日元気にとびはねていますので、みなさんもぜひ彼のやんちゃぶりを見にきて下さい。

# 子を残す工夫

すべての生物は子孫を残すことにより、次世代へと生命を継承させています。これは地球上に生命が誕生して以来、様々な環境のもとで休みなく続けられてきました。そして生物は、いかにしてより多くの子孫を残そうかと一生懸命努力しているようにみえるのです。



例えば、カマキリのメスは交尾中にオスを食べて、子供をつくるタンパク質源とし、カバキコマチグモの母親は、子を育てるために自らの体を餌として提供し、シロアリはたった1回の交尾によって、数秒置きに卵を産み、また、一生産みつづけるものもいます。カッコウは、他の小鳥の巣にこっそりと卵を産みつけておいて、その巣の持ち主に自分の子を育てさせるという実にずるいやり方もします。

このようにあらゆる種の生物がそれぞれに、独特な特徴をもって子を残そうとしているのです。しかし、それはひとつうらがえしてみると（仕組みとしては、本当はこちらが“オモテ”なのですが）、ある特徴を備えている個体は、その特徴を備えていない個体よりも、より多くの子を産み、その子もその特徴をもっている確率が高く、さらにより多くの子を産み……その結果として、子を産む特徴がその地域のその種全体に広がるという結果にすぎないのです。

つまり、懸命に子を産む努力をしているように見えても、実際には努力は必ずしも必要ではなく、子をより多く産むという特徴そのものが代々受け継がれていくわけなのです。



すこし、かたい話になりましたが、今回のテーマは「子を産む工夫」です。動物公園でみられるいくつかの動物の繁殖について、その特徴を特集しました。

読んでみて、そのすばらしい特徴を知り、またその特徴がなかったらその動物はどうか、思いをめぐらせながら、より深くその動物を見つめなおしてみてください。



# ライオンの子育て

ライオンが群れで生活していることはみなさん知っていますよね。ネコ科の仲間<sup>なかま</sup>で群れを作るのはライオンだけです。ここではライオンの群れの中で、どのような子育ての工夫がなされているのかのぞいてみましょう。

## どんな群れを作っているの？

ライオンの群れは「プライド」と呼ばれ、数頭のオスと多くて10数頭のメス、そしてその子供たちから成り立っています。メスは産まれた群れの中で一生を過ごし、その間に子供を産んでいきます。したがってメス同士は姉妹、いとこなどなんらかの血縁関係<sup>けつえんかんけい</sup>（血のつながり）があるのです。それに対してオスは、大人になる3才頃産まれた群れを出ていきます。そして、自分の産まれた群れ以外の群れに乗っ取りをかけ、前からいたオスを追い出して落ち着くのです。つまりライオンの群れは、血のつながりのあるメスたちの安定したグループと、短期間しか滞在しない（すぐに他のオスに乗っ取られてしまいやすい）血のつながりのないオスの小グループからできているのです。



## なぜ群れているんだろう？

ではなぜライオンは群れで暮らしているのでしょうか。ピューマや他のネコ科の動物のように、単独で生活するよりも何かよいことがあるのでしょうか。まず「捕えにくい獲物をとる」ということがあるでしょう。群れで狩り<sup>か</sup>をすると、自分より大きな獲物が獲れ、また、表に示す通り1頭よりも2頭で狩りをする方が、捕獲成功率<sup>ほくわくせいりつ</sup>が高くなる結果が出ています。ちなみにライオンに襲われる立場の草食動物はなぜ群れるのでしょうか。その答えとして、「警戒性を高めることができる」また、「被害をうすめる効果がある」ということなどが考えられています。

ライオンの頭数	捕獲成功率 (%)	
	トムソンガゼル	ヌーとシマウマ
1	15	15
2	31	35
3	33	12.5
4～5	31	37
>5	33	43

(Schaller による)

## 共同でおこなう子育て

群れの中のメスは発情期<sup>はつじょうき</sup>が一致する傾向<sup>けいこう</sup>にあり、そのため子供たちはほぼ同時に産まれます。つまり群れの中には、多くの同じくらいの子供がいることになり、その子供たちは母親以外にも、乳の出る全てのメスから乳をもらうことができます（共同哺乳<sup>きょうどうほ乳</sup>）。そのためよりうまく育つことができるのです。そしてオスが成長して群れを離れる時、同じ時期に産まれた子供がいると仲間を得るチャンスが大きくなり（連合グループ）、仲間と一緒に群れを離れたオスは、他の群れをよりうまく乗っ取ることができるようです。



## 非情!? な子殺し

運よく他の群れを乗っ取ることが出来たオスは、その群れにもともといた（自分と血のつながっていない）子供たちを殺すことがあります。残酷な話ですが、それはこういう理由からです。つまりその子供は前にその群れにいたオスの子供であり、自分の血を受け継いでいないため、他のオスの子供をメスが一生懸命育ててもそのオスには何の利益もないわけです。すなわち早く自分の子供を産んでほしい、他のオスの子供ではなく自分の子供の世話をしてほしいからなのです。また、メスは出産後その子供が2才になるまで発情しないのに対して、子供が殺されるとたった9ヶ月後には交尾の準備ができるようになります。子殺しは、メスを早く繁殖可能な状態にさせることにもつながるのです。まとめると、子殺しは新しく群れに入ったオスがより早く、そしてより多く自分の子供を持てるようになる仕組みといえるでしょう。

## 3000回の交尾？

実は驚くことはまだあります。大人になれるライオン1頭が生まれ、そして育つには平均して3000回の交尾が必要といわれています。成熟したメスは妊娠していない限り毎月発情して、その発情は2～4日間続き、その間は平均すると昼も夜も15分ごとに交尾をし続けます。この非常に多くの交尾にもかかわらず出生率は低く、さらにこうして生まれた子供のたった20%しか大人まで生き残ることが出来ません。このことから計算してみると、3000回の交尾がおこなわれて1頭の大人が育つことになるのです。交尾の成功率がこれほど悪いのはメスに原因（流産率が高いなど）があるのですが、ではなぜメスたちはこのように明らかに効率的でないやり方をおこなうようになったのでしょうか。1つの仮説として、メスが群れの中の全てのオスの交尾を受け入れることは、オスにとって1回の交尾の価値を下げるのでメスにとって有利だからではないか、ということがあげられています。3000回の交尾で1頭の大人が育つのですから、オスにとって1回の交尾をめぐって群れ内の他のオスと争うことはあまり価値がなく、またオスが自分の子供ではない子供を殺すかもしれないということを考えると、メスにとっては父親が誰であるかを不確かにして、オスが自分の子供を殺さないようにしむけるのが有利なのではないか、ということです。



いかがでしたか。動物園で見るのんびりとしたライオンたちからは想像できない、野生での生活を見てきました。1頭の大人を育てるための3000回の交尾や、一見非情に見える子殺しも、自分の子供をより多く残す方法の一つにすぎません。種のためではなく自分のために、群れの中のライオンとしてではなく1頭のライオンとして、次世代に遺伝子を伝える工夫をしているのです。

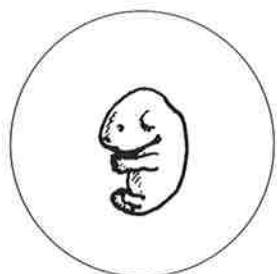
# ゆう たい るい 有袋類の子育て

有袋類はおなかにある袋の中で赤ちゃんを育てます。

## ① 赤ちゃんと袋

有袋類の産まれたての赤ちゃんはとても小さく、目はまだできあがっておらず、毛も生えていません。コアラでは右の図のように体重5.5gほどの未熟な状態で産まれてくるのです。

こんな赤ちゃんを守ってくれるのがお母さんの袋なのです。袋は体が乾くのを防いだり、温めてくれたり、お母さんが食べ物を探しに行く時でも、安全な袋の中でいっしょに移動することができるのです。



実物大

## ② どうして小さく産まれてくるのだろう

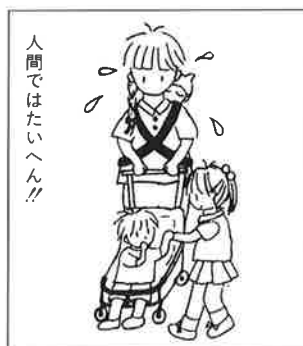
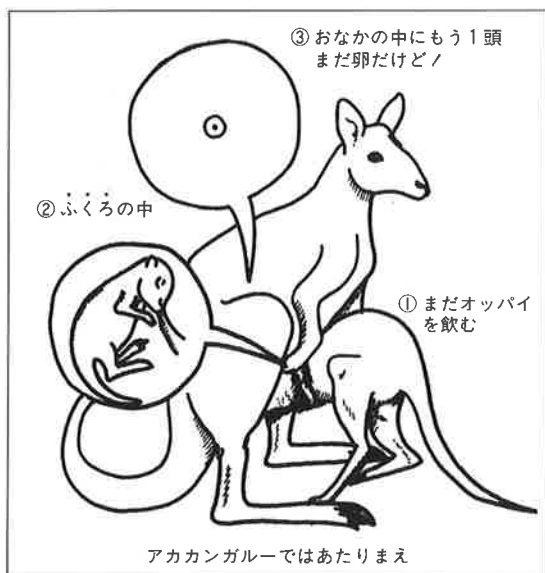
哺乳類の赤ちゃんは、おなかにいるとき胎盤を通してお母さんから体をつくるための栄養分などをもらって成長していきます。

でも有袋類はその胎盤が不完全なため、赤ちゃんが大きくなるまでの長い期間おなかの中に留めることができないのです。そこで、十分な体ができる前に産み落とされるのです。

## ③ 有袋類の子供を残す工夫

カンガルーの仲間の妊娠期間は約30日です。でも、必ず30日で産まれるわけではありません。

例えば、アカカンガルーは1頭の子供を出産するとすぐに発情して交尾をします。しかし、この時にできた胚(赤ちゃんのもと)は休んだ状態に入り、すぐに成長しないことがあるのです。そして先に産まれた子供が袋の外に出たら、2頭目の胚の成長が始まるのです。ですから約30日という妊娠期間よりも長い期間おなかの中になることになるのです。そして、2頭目が出産されるとすぐに交尾をし、3頭目の子供の準備が始まります。この時に1頭目の子供は、まだ袋の外から乳を飲んでいますが、ですからお母さんは、一度に違った大きさの子供を3頭育てることになります。



このように1回に産む子供の数はふつう1頭と少ないのですが、次々と子供を産む準備ができるしくみというのは、より多くの子供を残すためにとても大切な働きをします。また、胚の成長が一時止まるというのは、袋がふさがっているうちに次の子供が生まれるのを防ぐと同時に、たとえオスがなくなったり、袋の子供が死んでいなくなっても、すぐに次の子供を育てるのに力をそそげるといっても良い仕組みです。小さな子供を安全、確実に育てるのでできる有袋類の袋の発達のはたつは、その他の仕組みと組み合わせさせて、子供をより多く残すための工夫といえるでしょう。

# ダチョウの子育て

ダチョウは、鳥の中で最も体が大きく、その卵も一番大きいということは、みなさんご存知ですね。(しかし、卵の重さを親の体重でわると、鳥の中で最も小さい値になります。つまり、体のわりには最も小さい卵を産んでいるといえるのです。)さて、ここではダチョウの子育ての様子を紹介し



ます。ダチョウは、アフリカの草原にすんでいます。オスは繁殖期に入ると、広いなわばりを持つようになり、その中に浅いくぼみをいくつか掘ります。そして、気に入ったメスをくぼみの前に連れてきては求愛行動をとり、メスに受け入れられると交尾をします。何羽かのメスとそうしたことをくり返したあと、そのくぼみに最初に卵を産んだメスとペアを組み、子育てを始

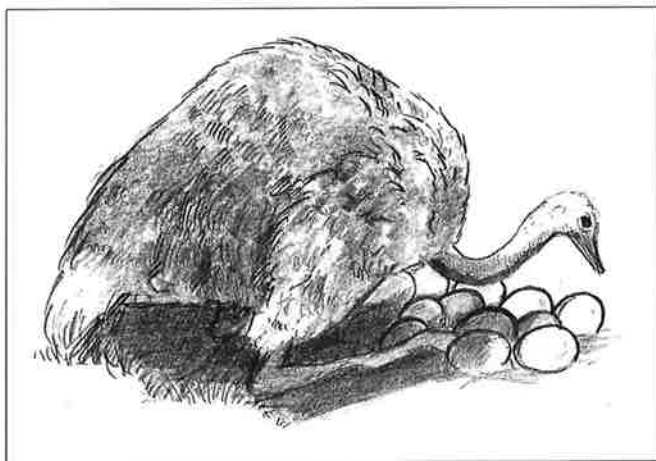
めます。メスは普通、1日おきに1個の割合で、平均12個位の卵を産みます。そして、昼はメス、夜はオスと交替し、お互いに協力しあって抱卵し、約42日後にヒナががえります。かえったヒナは、近くのヒナたちとグループを作り、親達に大事に育てられますが、生き残れる確率はあまり高くありません。

ここまでは、他の鳥の子育ての仕方とあまり変わりません。しかし、ダチョウにはそのペア以外に、自分の巣を持たず、他のペアの巣に卵だけを産んでいくという、一見ずるいメスがいるのです。このメスは、オスと交尾をしても、巣と、ペアになって交替で卵を抱いてくれるオスを得られなかったもので、その結果他のペアの巣に卵を産むことになったのです。

ここで不思議なのは、卵を産み込まれるメスが、このずるいメスを追い払ってもおかしくないのに、実際は、そのメスが卵を産みに来るとわざわざ場所をゆずり、ちょっと離れた所で産み終わるのを待っており、その後は自分の卵と一緒に抱卵までしてしまうのです。

なぜメスには、このような2通りの繁殖の仕方があるのでしょうか。ペアを組めなかったメスを思いやって、一緒に抱卵してあげるといわけではないはずですが、卵だけ産みっぱなしの方が、繁殖についてやす時間やエネルギーは少なくすむはずですから、それで同じくらいの数の子を残せるならば、すべてのメスがその方法を選ぶような気がします。しかし、実際にはそうはなっていないのです。これにはきっと、2通りの繁殖の仕方それぞれに良い点があり、また、子を最も多く残せる結果だと考えられます。

ペアを組んだ方では、外敵に巣を襲われた時、自分の産んだ卵の数よりもより多くの卵があった方が、自分の卵が食べられる危険がうすめられるという利益を得ている、といわれています。実際にメスは産み込まれた卵と自分の産んだ卵とを見分け、前者を巣の外側、つまり外敵に持ちさられやすい所においているようです。それに対して、巣を持たないメスにとっての利益はいうまでもなく、たとえ外敵に襲われやすい所に卵を追い出されるとしても、ペアを組めなかったことや巣を持たなかったことにより、その繁殖期にまったく卵を産まないよりは、ある程度子が残るのであれば、他のペアの巣に卵を産み込んだ方がよいのです。結局、繁殖の仕方が2通りあっても、それぞれのダチョウ1羽1羽が、生涯にわたっていかに多くの自分の子を残すかと工夫した結果、このようなしくみになっているので



# おなじウサギなのにこんなにちがうよ!



カイウサギとノウサギのあかちゃんです。



カイウサギ

ノウサギ



はだかんぼうで、自もあいていません。  
モニヨモニヨとうごくだけです。

毛はちゃんとはえています。自もパッチリ。  
じぶんであるけるし、からだもおおきいです。



## どうしてちがうの?



おかあさんのおなかにいるときは……。

カイウサギ

ちいさいあかちゃんが  
いっぱい。



ノウサギ

おおきいあかちゃんが  
すこし。



「え!? おおきいあかちゃんをいっぱいうめばいいって?」  
「それじゃあ、おかあさんのおなかがパンクしちゃうよ!」



# 🍄 どこでうまれてそだつの？ 🍄

カイウサギ



カイウサギのおかあさんは、ちいさくうまれてじぶんでうごけないあかちゃんのために、すあなをほってそだてます。ノウサギにくらべて、ひとりだちするまでじかんがかります。

ノウサギ

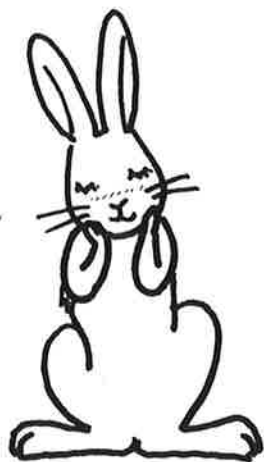


ノウサギのおかあさんは、すをつくりません。あかちゃんたちは、ヤブの中なかでじつとおかあさんがくるのをまっています。はやくひとりだちします。

## 🍄 つまり……。 🍄

カイウサギは、あなのなかであかちゃんをおおきくします。ノウサギは、おなかのなかであかちゃんをおおきくそだててからうみます。

おなじウサギなのに、  
こんなにちがう子そだて。  
でも、どちらも  
子そだてにいつしようにめい  
ウサギのおかあさんってエライ！



# アフリカゾウの子育て

動物たちはそれぞれの種によって違った、様々な子育ての方法があります。

たとえば、ヨーロッパヤチネズミは、最も良い環境のもとでは、妊娠してからたったの17日ですべての子を産みます。また、ユーラシアハタネズミは、授乳中に次の発情がきて2腹目の子がお腹にできるので、5週間のうちに2回出産できます。

このように、体の小さなネズミは、もちろん種やその生活形態によって違いはありますが、ほかのより体の大きな動物とくらべて、いかに多くの子を産むか、という方向で子を残す工夫がなされているようにみえます。これは、一概には言えませんが、小さい動物が他の動物におそれやすいなど、どうしてもおさえきれない死亡率の高さを、出生率の高さでおぎなっているのだと、とらえることができるでしょう。

それでは体の大きな動物として、アフリカゾウの場合はどうでしょうか。

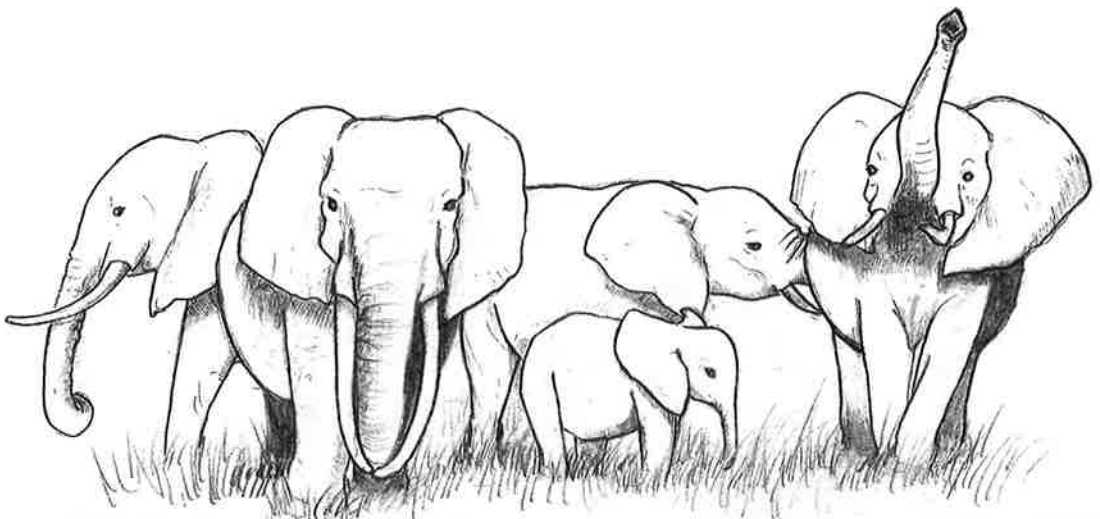
アフリカゾウは、アフリカのサバンナや森林に生息し、メスはリーダーを中心としたオトナメスと子からなる群れをつくります。オスは成長すると群れをはなれ、単独でいるかまたは一時的なオスのグループを作ります。

妊娠期間は18～22ヶ月ととても長く、また産まれたばかりの子は体重100kg、肩高1mと大型です。子は2年間、もしくは3～4年間親から乳をもらい、性成熟に達するまで10年近くかかります。メスはふつう3～4年に1頭ずつ出産しますが、条件が悪いとその間隔はもっと長くなる場合があります。

このように、アフリカゾウは長い妊娠期間のあとに大きな子を1頭だけ産み、さらに長い養育期間をかけて子を育てあげるので、出生率にけるネズミの子育てとは全く違いますね。

1頭の子を育てるのにこんなに長い年月が必要だと、一生の間に残せる子の数は少なくなってしまうように思えます。もっと多く子を残せるように、例えば養育期間を短くした方が有利なのではないでしょうか。なぜ、ゾウはそうしないのでしょうか。

一般に、動物の1腹で産まれる子の数は、その子が産まれた環境での食物の得られやすさに関連があると言わ





れています。つまり、一度にたくさんの数の子を産もうとすると、必然的ひつぜんてきに1頭1頭の子は小さく、未発達な状態で産まれることとなりますが、食物が得られやすい環境にあれば、結果として残る子の数は増える可能性があります。しかし、逆に食物が得られにくい環境においては、早く自分で食物をみつけられるようになるよう、大きい子を少しだけ産むか、あるいは親が子の面倒をよくみる方が有利になるのです。

さて、アフリカゾウのすんでいる所は、雨季と乾季がはっきりわかれており、それにより一時的に食物が得られにくい時期や場所ができます。つまりゾウの生息環境は、決してつねに食物の得られやすいものではないのです。さらに、ゾウは体の大きな動物ですから食べる量も多く、広い行動

圏の中を、必要な量の食物をもとめて移動して歩くことになります。つまり、アフリカゾウの子が自分ひとりで十分な食物を得るのはとても難しいことなのです。

そこで、親が子の面倒を見ることがとても重要になります。ゾウはとても頭の良い動物で特に記憶力がすぐれており、いつ、どこに行けば、どんな食物があるかをちゃんとおぼえています。逆に、おぼえておく必要性があったことから記憶力が発達したと言われているのですが、ゾウの子は長い養育期間中に食物のありかを親や、親と一緒にいる、より年長の個体から教わるのです。

また、子が親から教わるのは食物についてだけではなく、高い知能をもつゾウは1頭1頭の個性が豊かで、仲間どうしのつながりが発達しています。おたがいに助けあうゾウの姿をテレビ等で見たことがあると思いますが、そうした仲間どうしのつながりもまた、各個体の生存率を高めることは言うまでもありません。ゾウの子は、助けられ、教えられて仲間関係を身につけるのです。同じように高い知能をもつチンパンジーにおいても、アリ塚の中に棒をつっこんでアリを食べる等のように、各々の群れに独自の文化があります。これらは、繁殖はんしよくの時に遺伝子いでんしを通じて伝わるのではなく、親から子へ子から孫へ、群れ内の個体間の関係を通じて伝わるのです。ですから、ゾウの場合でも、養育期間が長いというのは大きな意味があるのです。

まとめると、大きな子1頭だけを出産し、その後長い期間つきそって子を育てながら随時ずいじ子を守り、また生きていくために必要なことを教える、それがゾウの子育てなのです。

つまり、ネズミのように、出生率を高くする(子をより多く産む)のではなく、産んだ子を大切に育て、その死亡率をできるだけおさえる、という方法でアフリカゾウはより確実に子を残す工夫をしてきたのです。

## 紹介します!!

### —— 期待度抜群の新人たち ——



#### ◀右より

丸山正樹(東京都出身、23才)

普段はもの静かなのに酒が入るとキレル。

フラミンゴ他担当。

伊藤和美(北上市出身、25才)

天才か?その発言はしばしば凡人の理解を越える。

獣医師。

鈴木貴久(愛知県出身、24才)

ラクビーで鍛えたこの体、足も速いが手も早い?

ポニー他担当。

杉田恵(大阪府出身、24才)

小柄な割に声がでかいのはやはりナニワの商人?

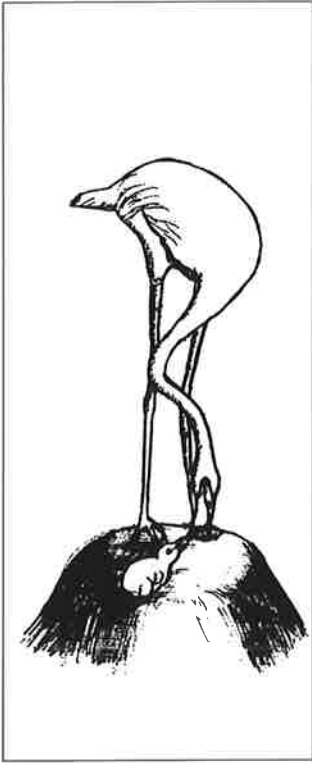
シマウマ他担当。

千葉正道(盛岡市出身、26才)

飼育係でもないのに走るウマがだ〜い好き。

庶務担当。

# フラミンゴの子育て



長い足とピンク色の美しい羽根をもつフラミンゴは、時に数十万羽という大群を作って、湖や沼などにすんでいます。水の中の小さな生物をくちばしの中で濾して食べるという変わった餌のとり方をしているのですが、その子育ての仕方にも他の鳥では見られない変わった特徴があります。ここではその繁殖の仕方について2つのことをお話ししましょう。

まずそのひとつは巣です。ふつう鳥の巣とって思いうかべるのは、木の上に枝などを組みあわせて作ったものですが、フラミンゴは土で巣を作ります。オスとメスが一緒に、水辺のやわらかい土をくちばして積みあげて、高さ約30cmの円筒形の台のような形の巣を作るのです。他の多くの鳥が、地上からの捕食者をさけるため、樹上に巣をかけるのに対して、フラミンゴは湖の中州など、まわりを水にかこまれた所に巣をすることによって、地上の捕食者をさけています。手近に木の枝がないから土を使うのだといえばそうなのかもしれませんが、巣を作る湖の中州などは、水位の変化が激しく、少々増水しても簡単には流されないよう土をかためて巣を作るというのはとても有効な工夫といえるでしょう。巣を30cmほどの高さにするというのも、増水に備えてのことなのです。湖にすむフラミンゴならではの工夫ですね。

さて、メスはこの巣に白い卵を1個産み、オスとメスが約1ヶ月交替で抱くと、最初は灰色をしたヒナがかえります。ここでフラミンゴの繁殖の2つめの特徴ですが、親鳥はヒナをミルクで育てるのです。ミルクで子育てをするのは哺乳類ではあたりまえですが（ただし、フラミンゴは乳首からではなく口移しにミルクを与えます）、鳥類の場合はミルクで子育てをするのはハトとフラミンゴの仲間だけです。さらに、哺乳類ではメスだけが授乳しますが、フラミンゴでは分泌を促すホルモンがオスにも作用するため、オスもヒナにミルクを与えるのです。さて、このミルク、ハトのものは白いのですが、フラミンゴのものは餌のプランクトンに含まれている赤い色素（カンタキサンチン）のために赤色をしています。これを見た人により、フラミンゴの親鳥は自分の血をヒナに与えて育てると誤解されていたことがあります。

なぜこのようにミルクで子育てをするのかはよくわからないのですが、もとをただせばひとつはフラミンゴの生息環境に関係があるといわれています。そこは塩分の濃度がとても高い特殊な水質で、他の鳥にはとても生活しづらいきびしい環境です。その環境の中で他の鳥が利用しきれずにいるプランクトンを食べている、ということが、ミルクを与える子育てに関係があるように思えるのです。推論ですが、とても小さなプランクトンをそのままヒナに与えるのはとても困難で、一度消化されたものを液体のミルクという形で与えるのが良い方法だったのではないのでしょうか。きびしい環境で子育てを成しとげるには、このミルクがとても大事な特徴だと思えるのです。

変わった巣作りとミルクでの子育ては、長い年月をかけての生息環境に対する適応の結果であり、テレビなどでフラミンゴが数十万羽という大群でいるのを見ると、それが上手に工夫された子育ての結果だと思えるのです。



# 子を残す工夫—動物園での仕事

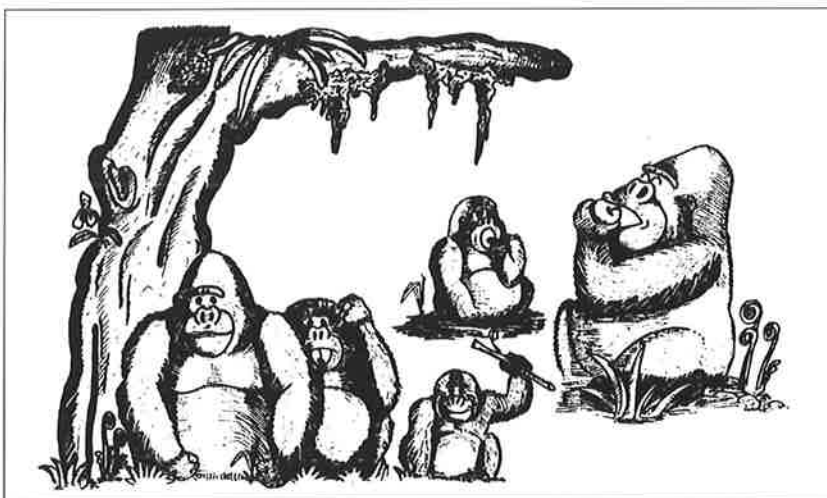
生物は本来、『いかに多くの子を残すか』を最も大切な使命としており、様々な環境で生きていけるように、長い年月をかけて姿・形等を変え、適応してきました。

あるものはユーカリの葉しか食べなくなったり、またあるものは小さい島にだけ生き残ったりと、動物によってその適応の仕方は様々です。

しかし、現在、世界中で人間の様々な営みによって環境に変化が起り、急激にそのバランスが崩れています。つまり、長い年月をかけてできたバランスの上で営まれているはずの生物本来の『子を残す』という使命が果せなくなり、絶滅に近づいている種類が増えてきているということです。

ところで、動物園では世界各地の生きた動物を大勢のお客さんに見て楽しんでいただいておりますが、その中にはとても数が少なくなってしまった種類があります。皆さんが知っている動物では、ゾウ、トラ、サイ、ツル、ワシ、インコ、ワニ等です。

ゴリラを例にとると日本では昭和32年から飼育が始まり、現在全国で46頭（オス25・メス21）のゴリラが飼育されています。（日本動物園水族館協会加盟園／同協会平成4年度年報より）



その中で、これまで繁殖に成功したのは7例しかありません。では、なぜゴリラの繁殖は難しいのでしょうか？元々ゴリラは群れで生活する動物で、子供は大人のことを見ながら成長します。挨拶や食べ物のあるか、敵から身を守る術はもちろん、繁殖にかかわる相手選びから交尾、出産、哺乳、子育てにいたるまで学習するわけです。

しかし、日本のゴリラ達は子供の頃オス1頭、メス1頭で外国からやって来る事が多くそれらのことを学習できずに大人になってし

まったのです。ですから上手く繁殖に結びつかないことが多かったと言われております。また、ゴリラに限らず、もともと群れで生活する社会性の強い動物は、ある程度の個体数をまとめて飼育する方がおそらくお互いの刺激があるのでしょうか、多くの繁殖がみられるようです。

このままでは皆、子を残せずに年老いてしまいそうなので、この様な現状を少しでも改善しようと、今ゴリラを飼育している動物園の中で1頭しかいないものや相性の良くないものを一ヶ所に集めて群れで飼育しようという試みが始まりました。ゴリラはどこでも人気者なので、いなくなる動物園では少し残念ですが、色々な困難を乗り越えて何とかゴリラに赤ちゃんを産んでもらい、ゴリラという『種』をずっと残していこうと各園が協力しているのです。

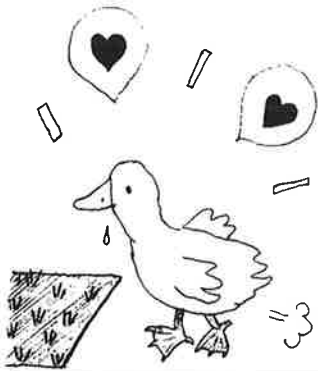
他にも、クロサイやタンチョウなど多くの種に対して同じ様な努力が動物園で始められています。

それらの動物は本来の生息地で、その環境ごと守っていくのが一番良いのですが、動物園でのこの様な努力も、今後ますます重要なこととなるでしょう。



# ● どうぶつこうえんウラばなし ●

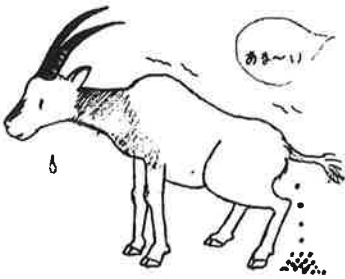
## アヒルのマットはおいしい!?



子供動物園には、たくさんのアヒルやガチョウがいますが、このアヒルたち、ひとつ困ったことがあります。毎日かたいコンクリートの上を歩いているので、足のウラにマメができてしまうのです。マメができると歩くのをやらそうにするし、また、そこからバイキンが入ったりします。そこでアヒルの部屋の中に、人工芝のマットを敷くことにしました。緑色のビニールでできていて、まるで本物の草のようです。これで歩くのが楽になるだろう、とホッとしました。

ところが、次の日からマットを水洗いするたびにどんどん芝が抜けていくのです。最初は「端っかがほつれてきたのかな?」と思っていましたが、ある日アヒルたちがつついて食べているのを目撃しました。「ショック!……」。人工芝があまり良くできているので、アヒルの目にも本物に見えたのでしょうか。結局人工芝のマットはすぐに取り去り、今は黒いゴムのマットを敷いています。これならもう食べられることもなさそうです(!?)

## チビくんも 和式スタイルが 大好き



昨年、シロオリックスのブックくんは、しゃがんでうんちをするので、和式スタイルが好きなのではないかということを書きました。

ところが、なんとブックくんの息子のチビくん（もう大きくなってチビではないのですが）までも、しゃがんでうんちをするようになったのです。これに気づいたのは、ある夏の日の朝でした。いつも通りドアを開けると「ブー」と鼻を鳴らし、勢いよく放飼場に走って出ていきましたが、すぐに、腰をスーと下げてうんちをしていたのです。これを見た時、「やっぱりブックの息子だな」と思った反面、「まだまだ甘いな」とも思いました。なぜなら、ブックのように前足で地面を掘ることや、うんちをする瞬間にさらにグーと腰を下げてりきむという行動が、まだできていなかったからです。

それにしても、このシロオリックスくんたちのうんちをしている時のスタイルは、なぜか親近感がわくし、また、この瞬間が一番かわいいと思うのです。

## 世にもおそろしい ハクチョウパンチ



ハクチョウといえば「白鳥の湖」に代表されるように優雅なイメージがあると思います。しかし、動物公園には、1羽だけちょっと気の荒いオオハクチョウがいます。

そのハクチョウ、去年の5月頃、外の世界に憧られるのか毎日のように柵の外に出ていました。勝手にあちこち散歩されても困るので、飼育係が捕まえて柵の中に戻さなければなりません。もともと、ケガをして保護されたので、飛ぶことができず、はじめは必死に走って逃げまわります。ところが、いよいよ追いつめられると攻守逆転、突然ふり返り、くちばしで服をつかむとたて続けに、両方の翼をうちつけてきます。さらに、ジャンプしてキックまであびせてきます。それは、まるでボクシングの連打のようで、ちょうどふくらはぎやふとももにあたり、2・3日は痛みが残るほどです。お客さんの見ている手前、騒ぐこともできず、平気な顔をよそおって、何とか捕えて仲間のいる池に戻します。

しかし、このハクチョウ、勝ったのは俺だと言わんばかりに、はばたきながらけたたましく鳴き叫びます。すこしは思い知ってもらわなければ困るのに、池の中央なので手も足も出ず、悔しい思いをするばかりでした。

そんなことを繰り返すうち、さすがにハクチョウもわかってくれたのか(?)、柵の外に出ることもなくなり、少しホッとしています。

## 「おはよう」

朝、獣舎へ動物たちの様子を見に行くと、昨年の6月3日に産まれたチャップマンシマウマのちびたくんは、格子の間から細い鼻先を出して、撫でてほしそうに待っています。人に馴らしすぎると大きくなった時、言うことを聞いてくれなくなることもあるので、あまり馴らすなとされているのですが、ついつい可愛さに負けて鼻づらや顔を撫でてしまいます。

家畜の馬は、首や耳のうしろをかいてやると気持ち良さそうにするので、同じ様にしました。ちびたくんは目をウツリさせジーンとしています。

次に耳の中に指を入れこすってやりました。ちびたくんは目をトローンとさせ、かいてもらっている耳の方へ首を傾げ気持ち良さそうにしています。

耳の中はほこりと脂でベトベトで、指はあつというまにまっ黒になります。ほかのシマウマたちは、耳をさわられるのが好きではありません。それなのに、気持ち良さそうにしているなんて、チョッピリ変わり者なのでしょうが……？



## やっとわかった フクロウの性別

動物公園には3羽のフクロウがありますが、今まで性別がはっきりしませんでした。

クジャクならば美しい羽根を広げる方がオスかメスかは、だれでも知っているでしょう。

でも、フクロウは姿、形、大きさ、色などがほとんど同じで、ひとめでどちらがオスかメスかを区別することができないのです。おまけに夜行性でプロポーズをする姿さえも見ることができませんでした。3羽の内1羽は毎年卵を産んでいたのにメスなのですが、残り2羽のフクロウが性別不明だったのです。

それまで産まれた卵は、すべて無精卵か途中でこわれてしまい、残る2羽のなかにオスがいるかわからず、もし3羽ともメスなら、他からオスを連れてこない、繁殖は望めないのです。

ところが、昨年産まれた卵は、結局はフ化までいかなかったのですが、卵の中で成長し始めているものがあり、少なくともオスが1羽いることがわかりました。今年こそ、上手に繁殖してくれないかと、期待しています。

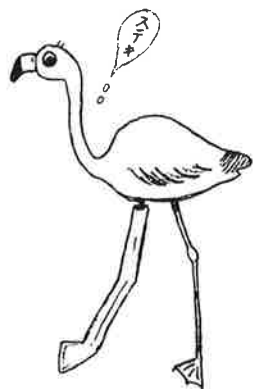


## ビニールの靴下を はいた フラミンゴ

寒くなってきたある日のこと、1羽のヨーロッパフラミンゴが、足を痛そうに歩いているのを見つけました。足の裏を見てみるとあかぎれになっています。その日から毎日薬を塗って治療をしましたが、すぐ池に入るため薬が流れてしまうのか、なかなか治りません。「どうしたら足がぬれないのか？」と考えた末、長い足にすっぽりと、ビニールの袋を靴下のようにかぶせてみました。私達は、なかなかの名案だと喜んでいました。ところがフラミンゴは、この靴下が気に入らなかつたらしく、一生懸命脱ごうとして足をふったり、つついたりしています。

次の日、フラミンゴを外へ出す時にその姿を見ていると、軽はずの靴下を重そうにして歩いています。「水が入っているのでは……？」と思うのですが、入っているはずがないという自信と、入っていてほしくないという希望が混ざって、夕方まで様子を見ることにしました。そして夕方、おそろおそろ調べてみると、やっぱり水が穴から侵入していて、袋の中にとまっています。これでは意味がないので結局は脱がせてしまいました。

せっかく買ってもらった新品の靴下をすぐに泥でよごして帰り、しかられた記憶がありますが、その時の親の気持ちがようやくこの時わかったような気がしました。





#### ササバギンラン（ラン科）

山野にはえる、とてもかわいらしい多年草で、高さは30～50cmくらいになります。

園内では白鳥池周辺の林の中で見られます。ササバギンランは、漢字では「笹葉銀蘭」と書きますが、その名の通り黄緑色の笹によく似た葉をつけ、小さな白い花を5月ごろに咲かせます。ラン科には、ササバギンランそっくりの花にギンランがあり、それに対して黄色い花を咲かせるキンランという名前の花もあります。なかなか楽しい名前がついていますね。

ところで、昨年園内に新しい散策路「四季の森」ができたのをご存じでしょうか？ここではヒトリシズカ、ミズバショウなどの植物や、アカゲラ、ミソサザイなどの鳥、他にもヤマアカガエル、トウホクサンショウウオなどが見られ、四季を通してさまざまな自然の姿を楽しむことができます。ぜひ足を運んでみてください。

## zoo もりおか

第5号 1994年

発行日 平成6年3月15日

編集・発行 (財)盛岡市動物公園公社

〒020 岩手県盛岡市新庄字下八木田60-18

TEL. 0196 (54) 8266

印刷所 三陽印刷株式会社